

## P27

### 患側の乳側切歯が異所性に早期萌出した片側性唇顎裂の一例

○日高 聖, 飯島静子\*, 藤原 卓  
(長大院・小児歯, \*長大院・矯正歯)

#### 【緒言】

当院では、唇顎口蓋裂のみならず、唇顎裂の症例に対しても、ホッツ床による哺乳支援に加えて、鼻・歯槽形態修正のための早期術前治療 PNAM (Pre-surgical Naso-alveolar Molding) を応用している。今回、唇顎裂患児の PNAM 治療中に患側の乳側切歯が異所性に早期萌出したため、手術を担当する形成外科医と処置方針を検討した結果、当該の乳側切歯を抜歯し、良好な結果が得られた症例を経験したので報告する。

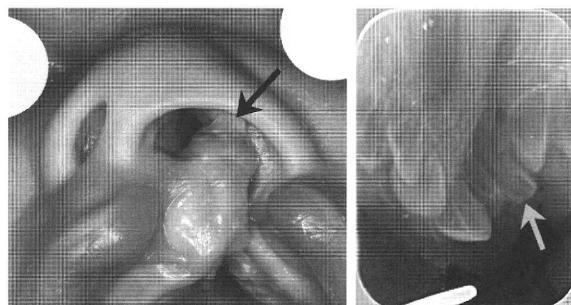
#### 【症例】

患児：初診時年齢 0歳0か月6日 男児

現病歴および現症：長崎市内の産科医院にて、在胎39週4日、経陰分娩で出生。出生時体重3060g、初診時体重3014g。顎裂は major segment の突出が著しく、また患側外鼻の変形が著しかったため、当院で行っている通法下でのPNAM治療の適応であると考えられた。

家族歴：第1子。口唇裂・口蓋裂の家系発症なし。

処置および経過：通法に従い、初診日に印象採得を行って、生後10日目にホッツ床を装着、生後18日目にNAMステントを装着した。その後、P型乳首を用いた哺乳によって体重増加は順調に経過していた。生後60日目に、患側の鼻腔へ向かって上方に歯槽から続く膨隆を認め、膨隆の先端には白色の石灰化物様組織を認めた(図1)。エックス線精査により、この石灰化物は、患側乳側切歯(LB)の異所性の早期萌出と診断された(図2)。また minor segment の顎裂側にも、乳側切歯様の歯胚を確認した。口唇形成手術を担当する形成外科医と協議したところ、当該の早期萌出歯は鼻腔底形成の妨げとなるため抜歯が不可欠で、また手術時には歯肉粘膜の抜歯創が治癒している状態が望ましいのとの意見であった。したがって即日抜歯とし、その後は創の治癒を促すため、CO<sub>2</sub>レーザー照射による創部の蒸散を2度にわたって行った。



<図1>

<図2>

矢印は異所性に早期萌出した患側の乳側切歯を示す

患児は予定通り、生後89日目に口唇一次形成術および歯槽歯肉骨膜形成術(GPP)を受け、口唇・顎・外鼻の形態改善について良好な結果が得られた。

#### 【考察】

唇顎口蓋裂における先天性歯および早期萌出歯の発現頻度は、両側性唇顎口蓋裂で10.6%、片側性唇顎口蓋裂で2.02%と、一般の発現頻度(0.02~0.19%)に対して比較的多いことが報告されている<sup>1)</sup>。特に、唇顎口蓋裂の場合、その多くは顎裂付近の上顎切歯であり<sup>1)</sup>、したがって早期術前治療を担当する医療者には、先天性歯/早期萌出歯が手術時の口唇・鼻腔底形成の妨げとならないよう、適切な対応が求められる。本症例では、形成外科医と連携し迅速な対応ができ、加えて抜歯創が治癒するまで十分な時間があつたため、良好な治療結果が得られたと考えられる。

また本症例では、唇顎裂の出生前診断はなかったが、初診時にカウンセリングを行い、両親からは治療の全般にわたって十分な協力と理解が得られていた。したがって、生後2か月の乳児に対して早期萌出歯を抜歯するという外科的侵襲が大きな治療についても、問題なく受け入れてもらうことができたと考えられる。

#### 【文献】

- 1) de Almeida CM, Gomide MR: Prevalence of natal/neonatal teeth in cleft lip and palate infants. *Cleft Palate Craniofac J.* 33(4):297-9, 1996